PROJECT

映像人類学の新たな課題――方法論から認識論へ

村尾静二

共同研究 ● 映像の共有人類学――映像をわかちあうための方法と理論(2009-2012)



インドネシア、バリ島の筆者村尾の調査地にて、影絵人形遣いの老師範の日常生活を撮影。筆者(右)、南出和余(手前)(清水郁郎撮影)。 第2回共同研究会では、メンバーの筆者、清水、南出がこれまでインドネシア、タイ、バングラデシュにて共同制作してきた映像作品を題材に、共有の視点から議論した。本稿に掲げる写真2点は、その様子を記録したもの。

共同研究の背景

現在、世界は映像に覆われ、「辺境」の地に生きる人びとの生活空間からわれわれの日常まで、あらゆるものが映像の対象とされるようになった。世界とは何かをめぐる多様な知識は映像を通して人びとのあいだを行き交い、映像を通して世界を理解することがこれまでにも増して日常化しつつある。そこでは、映像は個人と世界をつなぐもの、世界理解をうながすものとして、個人の知識や思考の形成と深く広く結びついている。

このような傾向は学術分野にも認められる。文化人類学においても、研究および研究成果の公表から教育にいたるまで、映像が積極的に活用されるようになった。各学会における民

族誌映画の上映や映像発表の急増はそのような傾向を端的に示している。そこでは、映像は活字による研究を補足するものという従来の役割にとどまらず、フィールドワークを通して文化の多様な側面を捉え分析するという、これまで民族誌が担ってきた役割を、また別の視点から担うものとして、これまでより積極的に研究に活用されるようになっている。

一方、このような傾向に対しては懸念もある。一般的に、映像制作とは撮影と編集のことだと思われることが多い。しかし、それらは制作過程の一部にすぎない。フィールドワークを経て民族誌映画を制作する場合、どの現場にも撮る側と撮られる側がおり、両者のあいだでさまざまな折衝がおこなわれる。撮影対象の選定にはじまり、調査地の人びとへの協力依頼、撮影承諾書、謝金の有無、撮影方法、撮影日程、完成作品の扱い方、視聴者は誰か、など多岐にわたる交渉がそこには含まれる(その多くは、フィールドワークを経て民族誌を執筆する場合と共通するものである)。

民族誌映画とは、このような両者の折衝の産物なのである。 しかし、実際には、それがいかなる過程を経て実現されたの か明示されることはまれである。そして、撮る側は、調査地 の人びとから撮影と公開の了解を得たという理由を根拠に、 映像を作品化し、上映することが常態化しつつある。映像は ときに両者を非対称な関係へと導いていく。

このような常態化を見直す視点を獲得するにはどうすればよいのか、文化人類学に映像を活用するとはどのようなことか、あらためて議論を始めるときがきているのではないだろうか。なかでも、研究者と調査地の人びとは映像をいかに共有することができるのか、映像にまつわる倫理とは何かという問題は、いま本格的に議論すべき課題であろう。また、これまで映像に関する議論の中心にあった映像制作の方法論も、この視点から読み直されるべきである。本共同研究は、以上のような問題意識にもとづいて組織されている。

映像人類学における共有という課題

映像人類学とは、映像による人類学研究であり、文化人類 学のなかのひとつの研究領域である。これまで多岐にわたる 研究成果をもつが、なかでも動きや空間など言語による分析 では捉えきれない事象の研究において大きな成果をあげてき た。動きや空間とは、具体的には、身体表現、技術、儀礼、芸能、 芸術、生態、それらをあわせもつ人類の営みそのものである。 また、映像による記録と保存も重要な研究課題である。

映像人類学が学問として体系づけられるのは、第二次世界大戦後のことである。しかし、1895年に映画が誕生すると、その数年後には様々な民族の姿がフィルムに記録されるようになった。文化人類学では、1898年にケンブリッジ大学が組織したトレス海峡探検隊において英国の人類学者アルフレッド・コート・ハッドンが撮影調査を行い、民族誌映画の嚆矢となる。そして1930年代後半、グレゴリー・ベイトソンとマー

ガレット・ミードはバリ島における調査のなかで映像を文化人類学のなかに本格的に位置づけた。このようにして、映像人類学は、動きや空間の研究、変容する文化の記録と保存において着実に研究成果を増やしていった。

その後、研究機関による組織的な映像制作や学会での議論を経て映像人類学が学問として体系化に向かい始めたとき、その中心的役割を担ったひとりがフランスの民族学者であり映画制作者でもあるジャン・ルーシュ(1917-2004)である。彼は映像を通して人類の営みを捉え研究するとともに、映像制作を通して研究者と調査地の人びととの関係性そのものと向き合った。

民族誌映画を制作しようとすると、研究者と調査地の人びととの関係は、映像を撮る側と撮られる側、映像を所有する側と所有される側といった非対称なものになりやすい。そして、こうした関係性そのものが映像作品のなかで問われることはまれであるが、そこにみられる力関

係のようなものが映像作品の基礎を形成しているのもまた事実である。それに対し、ジャン・ルーシュは、人類学者と調査地の人びとが、映像をともにみる経験を通して研究成果を共有するなかに、文化人類学における映像の可能性を求めた。新たな関係性のなかに映像制作を捉えるその試みは、映像の共有の人類学(shared anthropology)といわれる。

共同研究が取り組む課題

本共同研究は、この共有の視点に着想を得ている。ただし、 共有とは「みる」ことだけを意味するものではない。先述の通 り、映像制作とは複合的な活動からなり、整理すると

①プレ・プロダクション 「立案 | 「準備 |

②プロダクション 「調査地での交渉」「撮影」

③ポスト・プロダクション 「編集」「調査地での試写」

「成果の公表」「保存」

から構成される。本研究が取り組むのは、この映像制作の各 過程を共有の視点から捉え直し、人類学映像をささえる倫理、 受容と共有の方法についての多角的な議論へと発展させ、映 像人類学の可能性を拓くことにある。

映像人類学のなかで、民族誌映画の制作についてこれまで 主に議論されてきたのは、撮影と編集の方法論であった。ま た、調査地の人びととの信頼関係の構築も重視されてはきた が、それも実際には、制作者が人びとの内面を捉えた印象的 な作品をつくるための効果的な手法として重視されたのであ り、方法論の一環といえる。それに対して本共同研究が問題 とするのは、方法論ではなく、共有という視点から映像制作 の各過程を捉え直す認識論である。研究者と調査地の人びと はともに映像制作の主体であるという認識は、共同研究にお ける議論の基礎を成し、同時に、多くの制作者が無意識に拠っ て立つ撮る側の立場を見直す視点を提供するであろう。

映像制作では両者が主体であり、映像作品は両者の折衝の



北タイのアカの人びとが暮らす清水の調査地にて、制作した映像作品を村人たちと視聴し、議論する(清水郁郎撮影)。

産物であると自覚すること、そして、映像制作の各過程を、 撮られる側の視点から問いなおすことによってはじめてこの ような視点を獲得することができる。そして、共有の視点を 理解することは、人類学的映像制作における倫理的課題に応 えることを意味するのである。

また、現代社会では、だれもが映像を受容するだけでなく、 みずから制作し、発信する主体になる可能性があることから、 以上の問題は学術だけに留まるものではない。そのような現 代社会に生きる人びとが映像の活用を通して有効な人間関係 を築いていくうえで、本共同研究の成果がひとつの指標とな ればと願っている。

進捗状況について

以上の研究を具体化していくために、初年度は、研究者と 調査地の人びととの非対称な関係を様々な方法で克服しよう と試みている民族誌映画を題材にとり、各メンバーの専門性 を背景として多角的な議論を重ねてきた。そこにはメンバー 自身が制作してきた映像作品も含まれる。

また、映像を「みる」とは、「注視する」「批評する」「解釈する」「分析する」「記憶する」「(他の映像と)比較する」「編集する」などを含む複合的な活動であることもわかり、そこから、映像制作にも応用できる実用的な知見を数多く得ることができた。この意味において、「みる」ことと「つくる」ことは同義であり、この研究成果は今後の共同研究の基礎となるものである。

むらお せいじ

総合研究大学院大学・学融合推進センター助教。専門は映像人類学。論文に「映像人類学の現在」(村山匡一郎編『世界は映画を記録する:ドキュメンタリー再考』森話社 2006年)。民族誌映画に『護りの時空』(インドネシア、スマトラ島 2007年)、『老いの時空』(インドネシア、バリ島2008年 ポーランド、トルン映像人類学映画祭にて上映)がある。